

新国際競技ルール(試行)が確定

IWUF第11回技術委員会(北京)の最終協議で決着 来年の第8回世界選手権(モスクワ)から実施

国際武術連盟技術委員 石原泰彦

2月14～15日の2日間にわたり、中国・北京市で国際武術連盟(IWUF)第11回技術委員会が開催され、新国際競技ルールについて最終的な協議が行なわれた。その結果、懸案であったオリンピック競技にふさわしい内容を備えた国際競技ルールが、「試行ルール」として決定された。

国際武術連盟は、確定した新ルールに基づいて、さっそく、今月15日～25日に北京で開催される「国際審判員試験セミナー」で新ルールの内容を公開するとともに、各国・地域のコーチ、選手、審判員を対象にした「大陸連盟別新ルール訓練セミナー」を実施してゆく。

アジア武術連盟(WFA)が主管する「同訓練セミナー」は、「国際審判員試験セミナー」の直後の4月25日～30日に北京市で実施される。日本連盟はこのセミナーに、選手強化委員会が選抜した16人のコーチ・選手を派遣する。

新国際競技ルールは、来年9月にモスクワで開催される「第8回世界武術選手権大会」で「試行ルール」として採用される。その実施状況を踏まえて、モスクワ大会直後に、2007年の「第9回世界選手権大会(2008年北京オリンピックの予選大会を想定した大会)」に向けた正式ルールとして確定されてゆくことになる。

これを受けて、各国・地域は早急に新ルールに向けた訓練態勢を敷いてゆくことが求められている。

来年の日本の全国大会(来年4月の全日本競技大会、7月の全日本選手権大会)でも、新ルールに基づく競技部門が導入され、この部門から国際競技大会の代表選手を選抜することになる。

新ルールの行方については、当然のことながら、多くの関係者から重大な関心が寄せられてきた。新ルール確定の経過とルールの概要を報告する。

◎マカオ会議後の経過 — 改善点、依然として残った問題点：

本誌03年12月号(No.169)で昨年11月にマカオで開催されたIWUF第10回技術委員会の結果を詳報した。そのなかで、新ルールの技術問題について、それまで存在していた大きな見解の相違、対立点が、基本的に6項目の合意事項にまとめられ、大きな進展があったことを報告した。

注：マカオ合意6項目；

①低い難度動作(A、B難度)の数量を増やす。

②接続難度点数を大きくする。

③太極拳の接続難度動作を増やす。

④審判業務のコンピュータ操作方式に柔軟性を持たせ、多様な規模の競技大会に対応できるようにする。

⑤器械の投げ上げ(「抛」)+受け止め(「接」)は強制要求ではないのでルールに残す。

⑥音楽伴奏を義務づける規定は設けない。

これらの6項目のうち、①～④について、

IWUF技術委員会は、あらためて中国武術協会の専門家による改善作業を委託し、12月末までに、改善された内容を含む新ルールを「試行ルール」として作成し、国際武術連盟の加盟会員国・地域協会に配布することになっていた。

その後、中国側から12月下旬に仮の改善案

(難度動作一覧表のみ)が示され、1月初旬に改善ルールが技術委員会に示された。

しかしながら、示された内容には次のような改善とともに、大きな問題点が残されていた。

改善点：

1) 競技規則を「本則(基本条項)」と「附則(難度動作一覧, その他の詳細ルール部分)」に分けた。それにより、今後詳細ルールを改正し易くなっている。

難度動作一覧は、以前は全種目共用のものであったが、「長拳・器械類」、「太極拳・太極剣」、「南拳・器械類」の3種目別に分けたので、より見易くなった。

2) 採点の3部門((A組=「動作の質」、B組=「演技レベル」、C組=「難度動作」)のうち、B組において種目別に「主要技術動作」(手法、歩法、組別動作、器械の方法など)を設けた。設定されている主要技術動作が欠落すると、その都度0.2点が減点されることとなった。これにより、難度動作だけでなく、各種目の特徴を備えた主要技術動作を行なうことが具体的に要求されることになった。

注：「B組=演技レベル」については<別注1>を参照。

3) マカオ6項目のうち、④審判業務でコンピュータを用いない簡便な採点方式も併せて設けられた。

問題点：

1) ①低い難度動作(A, B難度)の数量を増やす、という合意事項にたいしては、「長拳・器械類」では、A級接続難度動作が数種類増設されて、一定の改善があった。しかしながら、「太極拳」と「南拳」は、1動作も増設されていない。さらに③太極拳の接続難度動作を増やす、という合意事項も全く反故にされている。太極拳の選手が、長拳の技術である「跳躍・空中回転・片足着地・静止バラン

ス」という難度動作を強要されるのは深刻な問題である。

2) ②接続難度点数を大きくするという合意事項にも全く対応しておらず、依然として、A級接続動作の加点=0.05点、B級接続=0.1点、C級接続=0.15点、D級接続=0.2点となっている。

その結果、選手は規定の難度点数と接続難度点数を獲得するためには、数多くの難度動作と接続難度動作を組み合わせを行なわなければならない。特に、高難度(C難度, C,D接続難度)を行なうことができない大多数の国・地域の選手は、A,B難度, 接続難度を8~12種類組み合わせなければ規定の点数に達しないことになる。

ちなみに、長拳のC難度動作は、ジャンプして空中で720度回転(2周)して着地するもので、また、C級接続難度動作は、片足で着地して静止バランスを完成させなければならない(表1-1, 表1-2を参照)。

このままでは、難度動作偏重の体操競技に陥ってしまい、武術競技の将来を損なうものになる。

注：「規定の難度動作点数」については<別注2>を参照。

3) 各国・地域の技術水準に大きな格差がある現状を考慮すれば、試行ルールとしてこれらのABC難度動作とABCD接続難度動作をそのまま実施するのは無理があり、何らかの制約的な枠組みを設けなければならない。さもなければ、多くの国・地域が1年半後の2005年9月のモスクワ世界選手権大会に参加できない事態になる。

◎日本連盟の対応、北京会議の開催：

これらの問題点はルールの根幹にかかわるもので、昨年7月の東京会議以来日本が再三

にわたって提起してきた技術問題が、基本的に解決されていないものであった。

日本連盟はこの事態を重視し、昨年12月末に、村岡久平副会長（国際連盟理事）と筆者が北京を訪れて、中国武術協会・国際武術連盟の役員、実務責任者との間で緊急会談を行った。会談では、昨年7月からの経緯にも関わらず技術の重点問題が基本的に解決していないことにたいして強い遺憾の意を表明するとともに、大至急、国際武術連盟技術委員会を招集することを申し入れた。

この結果、2月14～15日に第11回技術委員会が北京で開催されることが決まった。

◎北京会議に日本修正案を再提案：

昨年来、日本連盟は中国武術協会が作成した新ルール案とその後の修正案にたいして、数度にわたって具体的な日本修正案を提案してきた。その結果、一部の改善点は見られたものの、難度動作問題を中心とするルールの根幹に進展が見られなかったのは、極めて憂慮すべき事態であった。

新ルール策定の日程上、2月の技術委員会が最後の機会であると判断し、12月末から1月下旬までの間に、日本連盟選手強化委員会のコーチ等による対策会議と再修正案作りの作業が行われた。海外の技術委員とも意見交換を重ねながら、下記の日本提案を作成し、北京会議に臨んだ。

- 1) 難度動作に関し、2005年モスクワ世界選手権大会では、A、B難度動作のみで競技することを要求する。たとえ選手がC難度動作を行っても得点を与えない。これにより、試行期間中は、大多数の国・地域の選手が難度動作の基礎技術を習得することに重点を置き、段階的に、着実に、次のステップを準備する。
- 2) 難度動作の配点合計点2点（難度動作）の内訳として、難度動作得点1.6点、接続難度動作得点0.4点と定められている（規

定の難度動作得点→〈別注2〉を参照）。

中国修正案では依然として、A級接続動作の加点=0.05点、B級接続=0.1点、C級接続=0.15点、D級接続=0.2点となっている。

各級の接続難度加点を、0.05点ずつ増加して、A級接続加点=0.1点、B級接続=0.15点、C級接続=0.2点、D級接続=0.25点とすることを要求する。

点数が小さければ、選手は多くの接続動作を行なわなければならない。難度動作・接続難度動作の数量と、他の主要技術動作の数量を適切に組み合わせた競技を行うことができるように、接続難度点数を増加することを求める。

- 3) 太極拳・南拳の難度動作、接続難度動作を増加させることを求める。昨年9月に日本が提案した数種類の難度動作・接続難度動作は、中国修正案では全く無視されている。

今回あらためて、下記の動作を提案し、提案する全ての動作に日本選手による動作写真を作成して添付した。

太極拳；

- A 難度動作 1 種類、
- B 難度動作 1 種類、
- A 接続難度動作 1 種類、
- B 接続難度動作 3 種類

南拳；

- A 接続難度動作 1 種類、
- B 接続難度動作 2 種類

- 4) 危険かつ武術として非合理的な動作を削除することを要求する。

下記の動作は、難度動作から除くことを要求した。

①「后踢抱脚直立（=体を垂直状態に保ち、片脚を両手で真後ろに抱える）」；柔軟性を示すだけで、武術動作として意味を持たない。

②「原地后空翻+双蝶歩（=両足で後ろ宙

返しし、両膝で着地する)」、

③「単跳后空翻+双蝶歩(=片足で後ろ宙返しし、両膝で着地する)」；いずれも、膝関節の負傷を招く危険な動作である。

④「抛+搶背+接(=器械を投げ上げ+床を前転し+器械を受け止める)」、

⑤「抛+騰空摆蓮360度+接(=器械を投げ上げ+ジャンプして空中で外回し蹴りして360度回転+器械を受け止める)」；いずれも、非常に危険で、なおかつ、武術として意味を持たない動作である。

マカオ会議では、強制動作ではないのと理由でルールに残されたが、あらためて、この危険で無意味な動作に反対し、削除を求めた。

以上の提案を、英文、中文で準備し、北京での会議に提出した。中国案に対する修正案を書面で提出したのは、日本だけであった。

◎北京会議の経過と決定事項：

2月14～15日に北京市内で開催されたIWF第11回技術委員会には、委員11人のうち、2人の委員(ロシア、エジプト)の欠席を除き、中国2人、香港、オーストラリア、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、日本各1人の計9人の委員が出席した。

昨年の東京会議、マカオ会議を経ても、新ルールの根幹を成す難度動作問題が進展を見なかったこと背景には、武術のプロチーム体制を敷いている中国と、大多数のアマチュアチームの国・地域、さらに中間的な、国家機関や民間機構のバックアップを受けているセミプロチーム体制の国・地域(ロシア、ベトナム、ミャンマー、アジアの数カ国)との間で、技術レベルと訓練態勢に大きな格差が存在している事情がある。

筆者は、日本とヨーロッパ等、まぎれもなくアマチュアチーム体制の立場から、武術競技の段階的なレベルアップをすすめる観点

で、この技術問題に対応してきた。

過去の会議では、難度動作問題にたいして、総論で賛成、各論では中国を中心とする「高難度優先」の考え方と、それに反対する考え方の対立が繰り返された。

北京会議は、委員全員が日程的に「後がない」との認識のもとに、対立点、相違点を是が非でも解決する構えで行なわれた。

難度問題に関し、筆者はヨーロッパ委員と協調して議論をすすめていった。中国が過去4年近く中国国内で新ルールを試行してことの労は多とするが、それは世界の頂点に立つプロチームとして試行してきたものである。その難度レベルを直接、直ちに、国際競技の場に持ち込むことは不当である。あらためて、世界各国地域が新しいレベルの技術を段階的に試行する方策を持たなければならない、という観点で各論を展開していった。

各論点にたいして、委員全員による徹底的な議論が続けられた。一つ一つの議題にたいして、意見が鋭く対立し、議論を重ねた後に、一定の譲歩を伴いながら、結論を出してゆく作業が何ラウンドも繰り返された。

最後は、日本提案を中心に是非が問われ、下記の概要で決定が行なわれた。

1. 2005年9月のモスクワ世界選手権では、A難度、B難度動作で競技を行なう。選手はC難度を指定して競技しても良いが、C難度動作が成功しても、B難度の得点しか与えない。C難度動作が失敗したら0点とする。
2. 接続難度点数を各0.05点増加して、A級接続=0.1点、B級接続=0.15点、C級接続=0.2点、D級接続=0.25点とする。
3. 太極拳、南拳のA B難度動作、A B接続難度動作は、日本提案の動作のA B分類に一定の調整が加えられたうえで、添付の表2-1、2-2、3-2の通り増加し、あるいは改定することになった(太字で<新>と示されたものが新設増加されたもの、

<改>と示されたものが改定されたもの)。

4. 危険な動作等について：

1) 器械の投げ上げ+受け止めの2種類の動作は、従来、B接続難度とC接続難度であったが、いずれもA接続難度に格下げして残す(表1-2を参照)。

注記；長拳・器械ではA接続難度動作が多数あるので、器械の投げ上げ+受け止めの動作を選ぶ必要がない。完全に削除できなかつたのは残念であるが、選手が危険な動作を選択する必要がなくなったことは、成功と言える。

2) 南拳の「後ろ宙返り+両膝着地」は、「両膝」の要求を削除した。片膝で着地しても、両膝で着地しても良い「蝶歩」という表現に改めた。両膝を同時に着いて着地する危険動作は回避された。

3) 長拳の「体を垂直状態に保ち、片脚を両手で真後ろに抱える動作」は、伝統武術の「綿拳」に存在したことがあるとの強硬な主張のもとで、ルールに残された。

以上の概要で決定が行なわれ、日本が主張した修正案の約8割の内容が最終的に受け入れられた。

中国が主導し、多くの委員がそれに追随する非常に厳しい状況のなかで、上記の結果が得られたのは、満足すべきであった。

特に、太極拳、南拳のAB難度動作、AB接続難度動作が受け入れられたことで、多くの国・地域の、多くの選手が国際大会に参加することができる道が開けたことは、何よりも喜ばしいことである。

会議は、2日間延々と続けられ、上記の決定が記載された会議議事録(中文、英文)を委員全員が点検し、署名し終わったのは、2月16日午前4時であった。

◎競技ルールの課題と展望：

懸案の新国際競技ルールが「試行ルール」

という形で、ようやく策定された。

数千年、数百年の歴史と文化を持つ武術を、オリンピックという最新の課題を追求する現代スポーツのステージに押し上げてゆくのは、簡単なことではない。

技術委員会での白熱した論議の応酬は、技術の発展と変容のはざままで、生みの苦しみに直面している表れとも言える。

2005年モスクワ大会以降、直ちに「確定ルール」を策定する作業が待ち受けている。

1) 各国・地域で、難度動作を中心に、新しい技術にたいする訓練と試行を積み重ねなければならない。選手のケガにたいする医・科学サポート、難度動作の運動生理学的研究もすすめなければならない。

2) 難度動作は、「武術における難度動作とは何か」という課題と、現代競技スポーツとしての、競技性、鑑賞性とを併せて検討し、深めてゆかなければならない。

3) 今の「新競技ルール」は、審判業務の操作方法が複雑で、十分に合理化されていない。この点も不断に改善されてゆかなければならない。

4) 「新競技ルール」はオリンピックを頂点とする「高度なレベルの競技」を目ざしている。この競技に参加することができる選手は、年齢、体質、訓練条件の制約を受けて、極めて少数にならざるを得ない。オリンピックを目指す選手層を支えるのは、従来型の競技に参加する大多数の選手、愛好者である。

今後、日本における武術太極拳競技は、オリンピック型と従来型が並存しゆくことになる。

審判方法と審判基準も、オリンピック型と従来型に分化して行かざるを得ない。私見では、オリンピック型が生まれることによって、従来型の競技の審判基準は、あらためて、武術太極拳のそれぞれ

れの種目の特徴と伝統的な風格を、今よりも一層明確にしたものに回帰してゆくことができるのではないかと考える。

オリンピック＝技術の高度化と、従来型＝伝統回帰、がともに武術太極拳の一層の発展を促してゆくことを願う。

最後に、筆者が、国際連盟技術委員として新ルール問題に取り組むにあたって、多くの方々からご協力、ご支援をいただいたことに、

あらためて感謝申し上げたい。

一昨年「オリンピック署名・募金」に寄せられた、かくも多数の愛好者の方々の熱情と、日本連盟関係役員の方々のバックアップを支えに、力不足ながら任務を遂行することができた。

日本提案を共同で作成した選手強化委員会、太極拳指導員委員会のメンバーの方々と、技術面で最後まで強力な支援をいただいた孫建明・李霞両ヘッドコーチに、深く感謝申し上げます。

＜別注1＞「B組＝演技レベル」について：

競技の採点は、10点満点が、下記のように配点される。

◎A組＝「動作の質」に5点；3名の審判員により、「動作規格」と「その他のミス」を減点する採点が行われる。

◎B組＝「演技レベル」に3点；3名の審判員により、下記の表4に基づいて、3段階9級の配点を、3人の審判員の判定の平均点としたものが、選手の演技レベルの得点となる。

ただし、別項で各種目ごとに定めている「主要動作技術」（手法、歩法、組み合わせ動作、器械の方法等）が、1つ欠落する毎に、0.2点が減点される。

「主要動作技術」の減点は審判長が行い、上記の3段階9級の平均得点から、審判長が差し引く。

表4 「演技レベル」の等級と配点

評価分類	級 別	配 点
優 良	①級	3.00----2.90
	②級	2.89----2.80
	③級	2.79----2.70
普 通	④級	2.60----2.50
	⑤級	2.49----2.40
	⑥級	2.39----2.30
低水準	⑦級	2.10----2.00
	⑧級	1.99----1.90
	⑨級	1.89----1.80

＜別注2＞「C組＝難度動作演技レベル」について：

◎C組＝「演技レベル」に3点；3名の審判員により、選手が試合前に、事前に申告した「難度動作申告表」に基づいて、各難度動作が完成したかどうかを判定する。2点の配点のうち；

－ 「難度動作」は、1.4点を超えることができない。たとえ、成功した難度動作の合計得点が1.4点を超えても、それ以上は得点を与えない。

－ 「接続難度動作」は、0.6点を超えることができない。たとえ、成功した接続難度動作の合計得点が0.6点を超えても、それ以上は得点を与えない。

表1-1 長拳・剣術・刀術・槍術・棍術 「難度動作」の等級と配点

類別	A級+0.2	B級+0.3	C級+0.4
平衡	搬腿朝天直立	十字平衡	后踢抱脚直立
	側踢抱脚直立		
	仰身平衡		
腿法	直身前掃540度	直身前掃900度	
跳躍	旋風脚360度	旋風脚540度	旋風脚720度
	旋子	旋子軀体360度	旋子軀体720度
	騰空摆蓮360度	騰空摆蓮540度	騰空摆蓮720度
	側空翻	側空翻軀体360度	
	騰空飛脚	騰空正踢腿	

表1-2 長拳・剣術・刀術・槍術・棍術 難度動作 「連接難度動作」の等級と配点

A級+0.05→0.1	B級+0.1→0.15	C級+0.15→0.2	D級+0.2→0.25
騰空飛脚+坐盤	旋風脚540度+跌竖叉	旋風脚540度+提膝独立	旋風脚720度+跌竖叉
旋風脚360度+跌竖叉	騰空摆蓮540度+馬歩	騰空摆蓮540度+提膝独立	騰空摆蓮720度+馬歩
旋風脚360度+馬歩	騰空摆蓮360度+提膝独立	旋風脚720度+馬歩	旋子軀体720度+跌竖叉
旋風脚360度+坐盤	旋風脚360度+提膝独立	旋子軀体360度+旋風脚720度(4歩以内)	
騰空摆蓮360度+跌竖叉	旋風脚360度+旋子軀体720度(4歩以内)	抛+騰空摆蓮360度+接	
騰空摆蓮360度+馬歩	騰空飛脚+側空翻(1歩以内)		
側空翻+跌竖叉	抛+抡背+接		
抛+抡背+接 <改> B連接からA連接へ			
抛+騰空飛脚+接 <改> C連接からA連接へ			

- A・B・C・D各級の連接難度の配点は、各「0.05点」増加した。太極拳、南拳も同様。
- 「抛+抡背+接」(=器械を投げ上げ+床を前転+器械を受け止める)は、B級連接難度から、A級連接難度に改定した。
- 「抛+騰空摆蓮360度+接」(=器械を投げ上げ+ジャンプして外回し蹴り360度+器械を受け止める)は、<騰空摆蓮>から<騰空飛脚>(=前方へのジャンプ)に難易度を下げて、C級連接難度からA級連接難度に改定した。

表2-1 太極拳・太極劍 「難度動作」の等級と配点

類別	A級+0.2	B級+0.3	C級+0.4
平衡	前拳腿低勢平衡	后插腿低勢平衡	側朝天蹬直立
	側端平衡 <新>		
腿法	蹬腿・分脚		
	低勢前蹬足踩脚 <新>		
跳躍	騰空飛脚	騰空正踢腿	旋風脚540度
		騰空風脚向内軀体180度	騰空摆蓮540度
		旋風脚360度	
		騰空摆蓮360度	

- 2種類のA級難度動作を新設し、下記の動作要求を定めた：
 「側端平衡」= 側面に蹴り出す足は、肩より低くなく、上半身は45°以上傾斜してはならない。
 これに反すれば、得点を与えない。
 「低勢前蹬踩脚」= 体重を支えてしゃがみこむ足の大腿部は水平より高くなく、前に蹴り出す足は、床に触れてはならない。これに反すれば、得点を与えない。
 しゃがみこむ足のかかとは床から離れてはならず、前に蹴り出す足は、膝が曲ってはならず、足先は必ず外側に向けて開いていなければならない。これに反すれば、A組審判員が規則により、減点する。

表 2-2 太極拳・太極劍 「連接難度動作」の等級と配点

A級 + 0.05 → 0.1	B級 + 0.1 → 0.15	C級 + 0.15 → 0.2	D級 + 0.2 → 0.25
騰空飛脚＋起跳脚落地	騰空正踢腿＋起跳脚落地	騰空摆蓮540度＋雀地龍	旋風脚540度＋提膝独立
旋風脚360度＋ 起跳脚落地 <新>	騰空飛脚向內軀体180度＋ 提膝独立	旋風脚360度＋提膝独立	騰空摆蓮540度＋提膝独立
騰空摆蓮360度＋ 起跳脚落地 <新>	騰空摆蓮360度＋雀地龍	騰空摆蓮360度＋ 提膝独立	
騰空飛脚＋提膝独立	騰空飛脚＋騰空摆蓮540度 (無歩)		
騰空飛脚＋騰空摆蓮360度 (無歩)	騰空飛脚＋提膝独立 <改> A連接からB連接へ		
前拳腿低勢平衡＋軀体 180度・提膝独立 <新>	后插腿低勢平衡＋摆蓮脚 軀体180度・提膝独立 <新>		
低勢前蹬踩脚＋軀体180 度・提膝独立 <新>			

- 4つのA級連接動作と，1つのB級連接動作を新設した。
- 「騰空飛脚＋提膝独立」をA級連接からB級連接に昇格する改定を行なった。

表 3-1 南拳・南刀・南棍 「難度動作」の等級と配点

類別	A級 + 0.2	B級 + 0.3	C級 + 0.4
腿 法	直身前掃540度	直身前掃900度	
跳 躍	旋風脚360度	旋風脚540度	旋風脚720度
	騰空摆蓮360度	騰空摆蓮540度	騰空摆蓮720度
	原地后空翻	单跳后空翻	
跌 扑	騰空双侧端	向內軀体跳720度劈棍(刀)	
	騰空盘腿360度側扑		
	鯉魚打挺直立		

表 3-2 南拳・南刀・南棍 「連接難度動作」の等級と配点

A級 + 0.05 → 0.1	B級 + 0.1 → 0.15	C級 + 0.15 → 0.2	D級 + 0.2 → 0.25
旋風脚360度＋单碟歩	原地后空翻＋双碟歩 → ＋碟歩 <改>	旋風脚360度＋提膝独立	旋風脚720度＋馬歩
騰空摆蓮360度＋馬歩			
旋風脚360度＋单跳后空翻 (2歩之内)	单跳后空翻＋双碟歩 → ＋碟歩 <改>	騰空摆蓮360度＋提膝独立	騰空摆蓮＋馬歩
騰空飛脚＋提膝独立 <新>	騰空外摆腿540度＋馬歩	鯉魚打挺直立＋提膝独立	
旋風脚360度＋騰空飛脚 <新>	旋風脚540度＋单碟歩 → ＋碟歩 <改>		
	向內軀体跳720度劈棍(刀) ＋仆歩		
	騰空飛脚向內軀体180度 ＋提膝独立 <新>		

- 2つのA級連接動作と，1つのB級連接動作を新設した。
- B級連接の，「后空翻(後ろ宙返り)」の後に，両膝を着いて着地する「双碟歩」は，膝関節の負傷を誘発し，危険であるので，片膝を着く「单碟歩」で良いこととし，「双」，「单」の字を削除して「碟歩」と表現する改定を行なった。